

遺族の戦争体験「和顔に隠された母の思い」

箕輪 幸男（昭和 10 年生まれ）

一、別れの朝

柿崎病院のベッドの下で寝ていた私を呼ぶ声に目を覚ました私に祖母が「父さんが戦争にとられることになって、今日の午前中の出発だそうだ。だからこれから家に帰るんだ。」と告げました。柿崎区下牧から約 2 里の道を雨の中の明け方、迎えに来られた 2 人の方と 4 人で家路を急ぎました。この時私は 9 歳、父 36 歳、母 33 歳で、旧盆を前にした昭和 19 年 8 月 10 日の夜明け前でした。

母は、6 月の田植え終了後体調が悪く、県立柿崎病院に入院していました。看病には祖母が付添い、春 3 月 25 日に生まれた次男との 3 人が病院で暮らしていました。母は昭和九年秋の暮れ、父と結婚して約 10 年間働き通してでした。

父は秋の取入れが終わるか終わらない頃に、満州国^{まんしゅうこく}国^{こく}人^{じん}（現中国東北部）へ酒造りの杜^{とう}氏^しとして出稼ぎに行っていました。春、米山^{まいさん}山麓^{さんろく}に山桜の花が見える頃、満州から帰る父が待ち遠しく、また、楽しみでした。

二、父の居ない暮らし

父が出征した昭和 19 年 8 月 10 日以降、家族 9 人の暮らしが祖父の肩と母の背に当然のように重くのしかかりました。男手が必要な農作業は、親類縁者^{しんるいゑんじゃ}の方々の援助で何とか間に合ったようですが、母は夜明け前から夕方月の明かりを頼りに野良仕事でした。救いは東京から疎開してきたおばさんや、母とともに家族を支えたおばさんが居られたことです。

振り返って今考えますと、昭和 19 年は我が家の暮らしにとって大きな曲がり角の年でした。3 月 25 日次男を産んだ母は体調が優れず、田植え終了後の 7 月上旬頃入院いたしました。8 月 10 日には父に召集令状^{しゅうしゅうれいじょう}が来て、万歳の声の中、悲しみと不安を隠して仙台の連隊に入隊し、3 か月後の 11 月 17 日、輸送船とともに「齋州島沖^{さいしゅう}」にて戦死いたしました。

翌年の昭和 20 年 5 月 5 日、叔父^{おじ}も「黄海方面」で戦死いたしました。後から出征^{しゅつせい}し、先に戦死した父はこのことを知りません。男子 2 人を戦争で亡くした祖父の心はどんなでしたでしょうか。仙台の部隊へ向かった父は途中病院に立ち寄り、母を見舞ったそうですが、どんな言葉を残して思いを伝えたか私には分かりません。

三、どんな苦勞でも家族はひとつで

その後野良仕事の合間、母が父との思いを語り聞かせてくれました。留守家族で 4 人の子供を育てることが大変な時、1 人だけでも他家で育ててもらっても良いと父は言い残したそうですが、母は親子一緒に暮らすことが生きる力になり苦勞ではない。どんな苦勞も子供が居れば我慢^{がまん}できるから、他人に預けないでと言い通したそうです。

四、満州（中国東北部）移住に反対した母

満州国図們での酒造りに自信がついた昭和 16 年頃でしょうか、国策として満州開拓を目的とした移民が奨励された頃、父が出稼ぎでなく移民しようか、先ず 2 人が生活の基盤づくりのため先に移住し、その後家族を呼んで一緒に暮らすことを考えたらと言ったそうです。母は「そんなことできません。家族がばらばらで決して良いことはありません。私は行きません。」と言いつつ通したそうです。「中国残留孤児」とか「大地の子」と言った表現がありますが、母はどんなことがあっても「親子、あるいは家族は一つ屋根の下で一緒」の信念があったのだと思います。

父と結婚して約 10 年、33 歳で戦争未亡人となり、祖父母、夫の妹たち 2 人、自分の子供 4 人、疎開していた母子 3 人等大家族の中心となって昼夜働きづめでした。秋、農作業の合間に山栗を拾って売り、家計を助けたこともありました。

五、終戦以降の思い

昭和 20 年 8 月 15 日、敗戦のまま終戦となりました。出征した人々が順次復員される中、父は帰りませんでした。終戦から今日か明日かと毎日待っていたであろう母、野良仕事の場へ帰ったぞと手を振って来るのではと思う日々でした。

こうした願いや思いはむなしく、昭和 22 年 11 月 17 日、当時の県知事から 19 年 11 月戦死した旨の通知がありました。台所にいた母は、村役場の人からこの話を聞き、その場に座り込んでしまいました。

六、終生離さなかった夫の写真

普段は父との関係や夫婦のことについて話さない母が、91 歳の 10 月末に亡くなるまで、自分の財布の中に夫の写真を入れていました。時々写真に語りかけ一心同体の気持ちを持ち続けたのでしょう。我が家はこの母によって、戦中戦後父亡き後を凌ぎました。